

現代日本文学館

16

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館 16

谷崎潤一郎 1

昭和四十一年四月一日第一刷

著者 谷崎潤一郎

発行者 上林 吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二一一
振替東京七八七四三

印刷 凸版印刷

製本 凸版製本

定価 四八〇円

目次

谷崎潤一郎伝
井上靖 3

瘋癲老人日記 27

痴人の愛 126

春琴抄 302

刺青 344

麒麟 351

人魚の嘆き 361

悪魔 379

続悪魔 394

異端者の悲しみ
422

母を恋うる記
465

注解
483

解説
494

挿画
朝井閑右衛門「瘋癲老人日記」

田中良「痴人の愛」

伊東深水「春琴抄」

鍋本清方「刺青」

横山大観「麒麟」

水島爾保布「人魚の嘆き」

棟方志功「母を恋うる記」

谷崎潤一郎伝

井上

靖

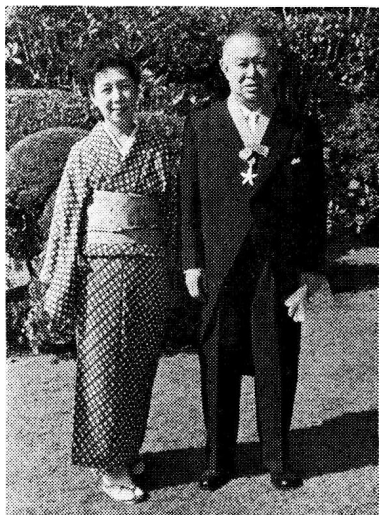
こんど谷崎潤一郎の評伝並びに作品解説の筆を執るに当たって、氏の半世紀の長きに亙る作家生活が生み出した夥しい数の小説、随筆類の主なものを読み返してみる機会を持った。「少将滋幹の母」「細雪」「鍵」「癡癡老人日記」等、終戦後に発表されたものは、それぞれそれを読んだ時の記憶もまだ鮮やかで、再読してさして前の印象を改めることもなかったが、それ以前の作品は若い時読んだままになっているものが多く、記憶も曖昧で、中には初めて読むような思いを懷かせられるものもあって、こうした通読の機会を持ったことは大変いいことだったと思う。その代り、長く宝石箱の中に仕舞い込んでおいたものが、取り出してみると意外に輝きを失ったものに変じている場合もあって、そうした時は損をしたような気持ちにもなったが、またその反対の場合もあった。私は今まで大切に仕舞い込んでいた幾つかの宝石を失い、その代り新しい幾つかの宝石を得た。新しく得た宝石の中で最も大きいものは「癡癡老人日記」である。これは発表当時読んで、氏の代表作の一つに算えるべきものであるとは思っていたが、こんど再読してと言うよりは氏の八十年の生涯の果てに置かれている作品として改めて読んで、前とは比較にならぬ程の強い感動をこの作品から受けた。この作品に於てみる谷崎潤一郎という作家の老成の仕方というか、解脱の仕方というか、ある

到達点への到達の仕方は非凡であると思った。このように不遑不遑しく、同時にまた気楽に死の前に居坐った人間のあるのを私は知らない。

「癡癡老人日記」は言うまでもなく、死と性を取り扱った小説で、主人公は老人である。作者は老人の持つあらゆる要素を抽出して、それで一人の人造老人を作り上げ、その老人に死と格闘させ、性と格闘させている。

「癡癡老人日記」は、氏がそれまで書いた作品の系譜に於てはどこにも席がない。前期のいわゆる悪魔主義の作品と称せられる「職の作品」とも、また「蘆刈」「吉野葛」等に見る古典美の世界とも、「陰翳礼讃」に見る美意識とも、上方文化への傾倒を美しい絨毯模様（じゅうたんよう）に織ってみせた「細雪」の世界とも、それらの孰れとも異ったところに坐っている。それでいて、この作品はそれまでの氏の作品と全く無関係かというところではない。女性崇拜や被虐症的なのは、氏がどの作品に於ても護符のように離さなかったと同様に、この作品に於てもまた離してはいない。西洋趣味も古いものへの憧憬も、それぞれ今までは違った頗る無造作な形ではあるが、そこにちゃんと投げ込まれている。大体作品の主題そのものが氏にとって決して新しいものではないのである。

それでいて出来上がった作品は全く従来のどの作品とも違っている。一種の抽象小説とでも呼ぶべきものである。氏は自分が持っているすべてのものを投入して、全く異つ



文化勲章(昭和24年受章)をつけて
左は松子夫人(昭和37年11月)

た作品を最後の作品として遺したのである。それならどこが違っているのだろうか。それははっきりしていると思う。この作品における氏は何ものにも酔おうとしないし、酔ってもいないのである。私は氏が自分のものをすべて投げ込んで、自分が誤した「源氏物語」からも取り得るものは取って書き上げたものが、「少将滋幹の母」であり、これこそ作家としての氏の完成を示すものであると信じていたが、氏はそのあとにもう一つの行き着いた世界を作品に遺しているのである。「少将滋幹の母」は私たちが知っている谷崎文学の集大成であり、そのみごとに完成であるが、「癡癡老人日記」の方はいさか趣を異にしている。これは作家としての氏が八十年生きた果てに小説の形に書

いた人生の決算書とでも言うべきものではないかと思う。氏はこの作品で初めて何ものにも酔っていない醒めた自分を示している。主人公の老人を美女の足型を刻んだ墓石の下に眠らせようとする作者の思いつきは、確かに作者らしくはあるが、もう氏のすべての作品にあった陶酔はない。氏はこの作品に於て少しも変貌はしていない。あくまで谷崎潤一郎である。ただ氏は氏を一生支配したものから、谷崎文学を形造ったそれこそ沢山の谷崎的なものから、解放されてはいないが、自由になっているのである。

「春琴抄」も「盲目物語」も「蘆刈」も多くの谷崎ファンを作った。それを作るだけの読者を魅するものがあつた。エロチシズムのむんむんとする初期の作品にも、亦同じものがあつた。「癡癡老人日記」にはもはやそうしたものはない。ある作品を読んで、それに魅せられ、作者に会わずにいられないような思いを持つ、そうした型の読者とは、「癡癡老人日記」は無縁である。また作者の人生感や人生哲学に傾倒する、そうした読者をも亦、この「癡癡老人日記」は受けつけないだろう。身につまされるものなどみじんもないのである。文学が読者に何らかの感動を与えるものだとなれば「癡癡老人日記」も亦そうしたものであるに違いないが、ただその感動はかなり厄介な困ったものである。人生いかに生きべきかとは無関係な感動である。人生はさして尊くもないし、生きる価値のあるものかどうかは判らない。併し、死と顔をつき合せた人間の行きついた姿



は、よかろうと悪かろうとこのようなものである。作者はこの作品でこのように言っているように見える。しかも、それを難しい顔はしないで投げ出しているのである。見た人は見ろ、見たくない人は見るな。作者はそういう態度をとっている。

と言って、片意

地になったり、ひねくれたりしているところは少しもない自分が生れつき持っているものは、相変らず後生大事に持っているし、自分以外の何者にもなっていないのである。ここにいるのはやはり「刺青」を書いた作家であるし、「春琴抄」を書いた作家である。ただ同じ作家であるが、すっかり醒めて円満具足の表情をとっていることだけが違っている。氏もいつ醒めたか自分でも知らないかも知れない。書いてみたら、ひどく身も蓋もない形でそこに醒めている自分を見出したのかも知れない。

私は氏は不思議な老成、解脱の仕方をしたと思う。いかなる作家もしなかった独自の人間完成である。氏は人間として高く完成したか低く完成したか知らない。併し、これだけははっきり言えると思う。氏が書いた「瘋癲老人日記」の主人公こそ、氏が書いた人物の中で、誰にでもすぐ人造人間と判りながら、しかも一番生き生きと生きているのである。

氏は第一作を発表して以来、誰も知っている通りずっと天才作家の名をほしいままにして来ている。併し、私は氏を天才と感じたこと、この作品に於けるほど強かったことはない。

谷崎文学の大きな流れは、「刺青」に源を発して、「瘋癲老人日記」にまで達したのである。「瘋癲老人日記」を到達点に置いてみると、私には大きな俯瞰を持った谷崎文学はまだ違ったものに見えてくる。豊かな水量で移動していた水の流れがついに河口を見付けて、流れの途中にあった瀬や淵が急に波立ち騒いでくるような、そんな思いを懷かせられる。

II

谷崎潤一郎氏は明治十九年七月二十四日、東京市日本橋区蠣殻町二丁目十四番地に、父倉五郎、母関の間に次男として生れた。長男はすでに夭折しており、のちに三男精二

以下六人の弟妹が生れた。父倉五郎は養子で、母関は谷崎家の三女であった。二人は結婚すると分家したが、氏が生れた頃、一家は谷崎活版所をやっている弟夫婦のいた本家に同居していた。

《——私の生れた家は日本橋の蠣殻町にあった。人形町通りを水天宮の方から来て、左側の絵草紙屋と瀬戸物屋の角を曲つて、一町ほど行つたところの右側にあったのである。

……（中略）……生れた家は、その頃の商店の構えといえど大概どれも同じように、間口のひろい、総二階の土蔵造りの家であった。……もともと、私の家は商いをしていたのではなく、つい近くにある米屋町——米穀取引所の気配を刷る印刷所であった。その時分には夕刊新聞などがなかったから、毎日夕方にその日の商況や相場などを記載して、それを相場師仲間へ売つたのである。いわば小さな新聞社のようなものだったが、この編集をやっていたのは、私が覚えてからは私の母の弟にあたる叔父であった。《「生れた家」大正十年》

父倉五郎は氏が生れた頃洋酒屋の店を持ったり、街灯や軒灯を点滅して回る仕事をする会社を経営したりして、いずれも失敗しているが、祖父久右衛門が一代で財を築き、そのあとを引きついだ氏の叔父たちの仕事で当座は軌道にのっていたので、一家は生活には何一つ不自由しなかった。氏はよく叔父や母に連れられて芝居見物に行っており、その頃の、多分四歳頃と思われる遠い思い出を、「幼少時代」

の冒頭で綴っている。

観劇のことに限らず、氏ほど己が幼時のことを愛惜の情をもつて作品の中に綴っている作家は少ないと思う。その意味では己が幼時の回想録とでも謂うべき「幼少時代」（昭和三十年—三十一年 文藝春秋所載）は氏の人間形成の跡を辿る上に大切な資料であり、同時にまた明治中期の東京風俗資料としても貴重なものである。

《——自分が小説家として今日まで成し遂げた仕事は、從來考えていたよりも一層多く、自分の幼少時代に負うところがあるのではあるまいか、……私の場合は、現在自分が持っているものの大部分が、案外幼少時代に既に悉く芽生えていたのであって、青年時代以後に於てはほんとうに身



父倉五郎 母関（明治25年頃）

についたものは、そんなに沢山ないような気がするのである。』（私の『幼少時代』について）昭和三十年）

そしてこの幼少時代に於て、作家としての氏の生涯に消えることのない強い影を落したのは母関女であつた。「母を恋うる記」を最初の作品として、多くの作品で、いろいろに形を変えて、母への思慕を語り、幼時自分の心に焼きつけられた母の美しさを描いている。氏は永遠の女性の原形を氏を生んだ女性から得ている。「蘆刈」、「盲目物語」、「吉野葛」等の作品に登場して来る女性はいずれも母関女の分身であるとも言えよう。母関女と別れて暮したわけでもないし、特別に母親を慕わなければならぬ環境にあつたとも思われないが、この異常とさえ思われる母親に対する思慕と憧憬は、長い生涯に於て消えることがなかったものである。

「——私はよく、母が美人に見えるのは子の慾目ではないか知らん、誰でも自分の母の顔は綺麗に見えるのではなからうか、とそう思い思ひした。顔ばかりでなく、大腿部の辺の肌が素晴らしく白く肌理が細かだったので、一緒に風呂に這入つていて思はずはつとして見直したこともたびたびであつた。」（幼少時代）

氏はこの永遠の女性型の女性のほかに、もう一つの型の女性を理想の美の型として選んでいる。それは処女作「刺青」に出て来る女性であり、これまた幾多の作品に於て、形を変え、姿を変えて登場して来る。「春琴抄」の春琴も

そうだし、「癡癪老人日記」の嬬子もまたそうである。どこかに悪魔的なところを持ち、慕いよる男性を己が前に膝まづかせずにはおかぬ女性である。こうした型の女性と、作家としての氏は生涯縁を切ることはできなかったのである。多くの作家が第一作に登場する己が創つた人物に一生支配されるように、氏も亦この作家の担う宿命から例外ではなかったのである。

それは兎も角として、永遠の女性型の女性と娼婦型の女性、精神的な女性と感覚的な女性、この二つの全く相反した型の女性を、氏はある時は別々に描き分け、ある時はひとりの女性に両方の要素を持たせ、谷崎文学に登場する女主人公たちを創り上げているのである。

氏が六歳の時、父倉五郎は三度転業して、米穀取引所の仲買店を蠣殻町一丁目に持ったが、三年後に営業不振でこの店も畳んでいる。そして氏が十歳の時から是一家は叔父や伯父の世話になつて生活して行かなければならぬ境遇に落ち込んでゐる。このような父の失敗や、それに伴つての転住転居は氏を早熟多感な少年に育てて行く。

明治二十五年、七歳で、日本橋区坂本町の市立尋常小学校へ入学する。入学当時は、附添の乳母なしには通学できない内気な少年であつたが、受持の野川闇栄先生の好指導を得て次第に頭角を現わし、小学校はずっと優等生で通すことになる。十歳の時、雑誌「少年世界」が創刊され、そ

ここに載った小説や歴史物語に熱中した。この頃から高等小学校四年を卒業するまで、小学校の同級の文学少年たちと文学グループをつくり、氏の作品「小さな王国」を思わせるような特殊な雰囲気の中に成長した。幼稚園の頃から一緒に、家が没落してから苦境に立った氏につねに支援を惜しまなかった親友笹沼源之助も、その仲間の一人だった。仲間たちは頻繁に集り、文学を語り美術を論じ、昂然として少年文士を気取った。たとえ



尋常高等小学校時代 後列中央谷崎 前列右端笹沼氏 四人目稲葉清吉先生（明治三十三年頃）

ばこんな話がある。その頃どこへ行くにも二人連れだった笹沼源之助と、よく受持の野川先生の家に遊びに行った。先生から芝居の話や絵の話聴いての帰り、いつも寄るそば屋があった。そんな年頃でそば屋へ入るのさえませているの

に、ふつうならおかめとか天ぷらを注文するところ、谷崎少年は気取って、「あられをくんな」と声をかけた。あれというのはいしらの入ったそばで通人でなければ知らないそばなのである。浜本浩「大谷崎の生立記」が伝える微笑ましいエピソードである。尋常科を終え、高等科に進むと、先輩の中学生が中心でやっていた全部肉筆で書かれた回覧雑誌「学生倶楽部」を引継ぎ、氏は花月散士または笑谷居士というペンネームで、歴史、小説、図画などをさかんに書き寄せている。こうした早熟な小学生たちを見守り指導していたのは、担任教師であった稲葉清吉先生である。稲葉先生は高等一年生に儒教や仏教の哲理を解き、太平記や平家物語の美文を暗誦させた。そうした教導に直ちに反応を示した天才児童谷崎は、先生に特に寵愛された。氏は「幼少時代」のなかで、自分の生涯で凡そ師と名づくべき人々のうちでこの人以上に強い影響を与えられた人はないと語っている。この頃好んで読んだ本は、「新八大伝」（巖谷小波）「日本歴史譚」叢書（大和田建樹）などであった。また十四歳の時、漢学の塾に通って、「大学」「中庸」から「十八史略」などを習い、英国婦人の経営するサンマー塾で英語の初歩を習っている。

阪本小学校高等科を明治三十四年に卒業、卒業成績は二番。当時氏の家は既に窮迫著しく、氏を上級学校へ行かすだけの余裕を持たなかったが、友達の笹沼源之助（笹沼家は東京で唯一の高級中華料理店僑楽園を経営していた）

や伯父たちの援助で府立一中に入学、ここでも異常な秀才ぶり、全校を驚歎させた。当時一級上に在学していた辰野隆博士は、小学校から大学を卒業するまで中学時代の谷崎氏はど華やかな秀才にお目にかかったことがない、と言いつ、「旧友潤一郎」その他の随筆でその頃の氏の面影を伝えている。中学生の谷崎氏は両手を上着のポケットに突込み、眼を光らせながらのそりのそりと精悍な野良猫のように感じて歩いた。ある日、体操の時間に木馬の飛び越えをやらされた。体操の得意な辰野氏は、一旦逆立ちの姿勢になり、更に中抜けするという妙技を発揮して、鬼久保という渾名の、髯面の体操教師を大いに喜ばせた。谷崎氏の番がきた。鉄棒にぶらさがればぶらさがったきりの谷崎少年に木馬が飛べるはずがない。目標に近づいてから速力をゆるめることもできない少年は、体の勢いで前にのめり、木馬で鼻柱を打ち、砂の中に顔を突込んだ。起き上った少年の顔は、砂と鮮血にまみれていた。――顔を洗ってこい！と教師が怒鳴った。全校に鳴りひびいた秀才谷崎少年は、顔を洗って再び列に入った。鼻の孔に紙を詰め、跛をひきひき鬼久保の号令に歩調を合わせた。

無器用な秀才、それでいて少し不良じみた、毅然としたところのある少年の姿がここにある。

幼少時代の神童ぶり、早熟ぶりは、氏の小説「小さな王国」や「神童」などのいわゆる少年ものに描き込まれている

るが、ここでやや詳しく作家の少年期を顧みたのは、小説と伝記的事実の間に符牒を合わせてみるためではない。早くから開発された氏の才能は、早熟にありがちな小さな完成とか急速な衰弱から完全にまぬがれて、洗練された感性の一番下の層として後年まで生き残ったということを指摘しておきたいのである。氏の生活も趣味も、その後大きな変遷をとげるのだが、それはひとつのものが流れ去ったり枯れたりした後で別のものが生れるというのではなしに、積み重ねられ、層を成していくという種類の変遷の仕方であった。氏は自分の好みの趣くまま、何ものにも制されることなく生きていったが、何ものにも制されまいとする決意に於て潔癖であったといえよう。このことは氏が己れを小説家として意識する以前に、自らの裡にそなわっていた強固な天稟であった。

III

氏は府立一中から一高英法科、転じて英文科を経て、東京帝国大学国文科へ入学した。明治四十一年、二十三歳の時である。一高から大学へ移る時に、全く背水の陣を敷くつもりで文科に転じた。それも最も人氣の悪い、兎角時勢おくれのように思われがちな国文科であった。それは、いよいよ創作家になろうという悲壯な覚悟をきめたので、国文科だったら、学校の方を怠けるのに一番都合がいいと思ったからであった。と、氏は「青春物語」（昭和七年――

八年)で述懐している。家の資産や援助を全く当てに出来ない氏は、多くの文学を志す青年と同じように、去就に迷った。それに氏といえども、やはり自分の天分に疑いを持つこともあったであろう。十八九歳から二十四五歳頃までの間は、「暗澹たる危惧」の時代であり、「悲壮な覚悟」を強いられていた時代であった。

四十三年九月授業料滞納のため論旨退学となったが、小山内薫を中心に、和辻哲郎、後藤末雄、木村莊太、大貫晶川らによって八月頃から計画されていた同人雑誌「新思潮」(第二次)に勧誘され、それに加わった。それ以前に、二、三の習作を試み、「帝国文学」などで没書にされ失意のうちにあった氏にとっては、まさに新しい希望の舞台で



大学時代 (明治四十二年頃) 笹沼源之助氏撮影

ある。九月に発行された「新思潮」創刊号に戯曲「誕生」、十月号に戯曲「象」、そして十一月号に「刺青」、十二月号に「麒麟」を発表した。

当時の明治末期の文壇は、自然主義派と反自然主義派の併立状態にあった。併し、「破戒」(明治三十九年)を書いた島崎藤村、「蒲団」(明治四十年)の田山花袋などが中心人物であった自然主義と、ほぼ二、三年後に登場してきた雑誌「スバル」に拠る耽美派、雑誌「白樺」に拠るいわゆる白樺派の作家達との間に、はっきりした思想的な対立があったわけではない。文学理念の上では、互いに侵し合い、修正し合っていたところの方が多かった、といえよう。耽美派の旗手であった永井荷風が、自然主義にことさら反対の態度を表明したことはなく、自然主義派の方も、荷風のデビュー当時の作品に高い評価を与えていたことなどは、その間の事情を物語るものである。

耽美派の牙城は、「明星」の後を嗣いで発刊された雑誌「スバル」であった。「スバル」と繋りのあったものは、荷風の主宰した「三田文学」であり、それに四か月遅れて創刊された「新思潮」である。氏はこの帝大系同人雑誌「新思潮」の中心的存在として、「誕生」「刺青」「麒麟」等を発表したのである。

「スバル」の中心人物、木下杢太郎、北原白秋らが、若い、芸術至上主義的傾向をもつ、詩人、作家、美術家を糾合し

て「パンの会」をつくった。それは、若きと、ややロマンチックな熱気にあふれる一大集団であり、そのメンバーだった高村光太郎は「青春の（無鉄砲な）爆発」であった、と回想している。

既に「刺青」を世に問うた氏は、四十三年十一月二日に開かれた「パンの会」の大会に出席している。この日の会は洋行する石井柏亭の送別を兼ね、稀に見る盛会であった。与謝野鉄幹を頭に戴くいわゆる耽美派とそれに連なる人々が一堂に会し、それに新興の息吹にあふれた白樺派の作家たちが加わった。「新思潮」同人たちと初めて「パンの会」に顔を出した谷崎氏は、ここで、敬愛の的であり、作風の上で師とも仰いでいた永井荷風に初めて出会う。「あれは誰、あれは誰」と次々にやってくる先輩たちを指しながら仲間たちと囁き合っていると、瘦軀長身、黒い背広を着こんだ二十八九歳の紳士が会場の戸口へ入ってくる。荷風だ。一瞬息を詰まらせながら、その優雅な身のこなしにうっとりと思惚れる。会の空気は次第に昂まり、人影が入り乱れるが、氏は荷風のことを忘れることができない。遂に意を決してこの先輩の前に自ら名のりをあげる。その時の感激を氏は「青春物語」のなかで生き生きと回想している。

——最後に私は思い切って荷風先生の前へ行き、「先生！僕は先生が好きなんです！僕は先生を崇拜しております！と云いながら、ピョコンと一つお辞儀をした。先生は酒を

飲まれないので、端然と椅子にかけたまま、「有難うございます、有難うございます」と、うるさそうに云われた。」

翌明治四十四年は氏にとって生涯の記念すべき年であった。氏はこの年一月、戯曲「信西」を「スバル」に発表、以後一年の間、「彷徨」「少年」「幫間」「颯風」「秘密」などの諸作を矢つぎばやに生み出した。ためられていた才能が堰を切って一挙に流れだしたような、若い力に満ちた初期作品群である。こうした時に当って、荷風の評論「谷崎潤一郎氏の作品」が「三田文学」十一月号に掲載された。荷風は《明治現代の文壇に於て今日まで誰一人手を下すことの出来なかつた、あるいは手を下そうとしなかつた芸術の一方面を開拓した成功者は谷崎潤一郎氏である。》といった調子で書きおこし、その作品の特徴の第一を肉体的恐怖から生ずる神秘、幽玄、第二を全く都会的な事、第三を文章の完全なる事とし、「氏の作品を論評する光栄を担う」という言葉まで使った。新進ではあったが、既に四十二年「ふらんす物語」を刊行して以来、文壇注目の人であった荷風の、この正面切った激賞によって、谷崎氏の新進作家としての地位は決定したのである。氏は、これより前「暗澹たる危惧」の大学時代に、強度の神経衰弱に罹り、茨城にあった親友笹沼源之助の借栗園別荘に転地療養したが、その折、そこで荷風の「あめりか物語」を読んで強い感銘を受け、「自分の芸術上の血族の一人が早くもここに

現われたような氣」がし、「誰よりも先にこの人に認めて貰いたい」と思った。まさしく氏は、この時望んだように荷風に認められ、稀にみる華々しきで文壇に登場することができたのである。

翌四十五年、再発した神経衰弱に苦しみながら、「悪魔」^{あつち}「羹」などの問題作を発表し、次第に本格的な作家生活に入っていた。

以来大正七年頃まで、新奇華麗な意匠をこらした短篇を数多く生み出していった時期を、氏の初期作家活動として考えられよう。代表的な作品に「お艶殺し」「お才と巳之介」「神童」「人魚の嘆き」「異端者の悲しみ」「小さな王国」などを算える。この間、伝記として記しておくことは、



長女鮎子を抱いて（大正5年3月）

大正四年、三十歳で石川千代子と結婚、本所新小梅町に家を持ったことである。翌五年、長女鮎子が生れている。そして七年、家族を実家に預け、一人で中国を旅行している。この頃から、一年ほど前に知合った無名作家の佐藤春夫氏と近くに住むようになり、親交を深めていく。佐藤氏は大正七年「お絹とその兄弟」を書き、八年「田園の憂鬱」を発表してゆるぎない地位を確立した。

初期の作品は、唯美的あるいは悪魔的などと称されてきた。この形容詞は、平面描写を唱え、無技巧の技巧をその理想としていた自然主義が主潮であった当時の文壇に、氏の作風が強い衝撃を与えたことを示しているが、作家に貼られるあらゆるレッテル同様、はなはだ漠然としたものであり、何ほどのことも説明してはいない。ここに、私なりにこの時期の氏の作風に見られる特徴を二つ拾いだしてみよう。そのひとつは、小説の素材にも文章にも、じつに絢爛たる意匠がほどこされていることである。氏にとつて、小説とはまずなによりも氏が営々として培ってきた感覚や官能の、十全なる解放であったはずである。そして氏の肉体に裏打ちされているそうした感覚的なものをそのまま小説の世界に置くためには、文体の細心な知的操作を必要とした。いま私はそのよく工夫された装飾的な文体をそれ自体としては高く評価することはできないが、そこにこめられた肉体的な感覚の世界の開放という意味は、近代文学の流れの中で重くかつ大きかったと思う。いまひとつの特徴



女優岡田嘉子とともに（大正末期）

は、人間の感覚がとらえる美や快楽が、人間と人間（男と女）の間に果てしない葛藤（かたつむし）を呼びおこし、そこに緊張した劇的關係が生れる、という氏の全作品に影を落としているテーマである。セックスが人間を破滅させ、あるいは押し流していく。これは、氏がはじめてわが国の小説に持ち込んだテーマであり、氏はそれを生涯を通して追求していく。

IV

余程の幸運と偶然の力に恵まれぬ限り、どんなに才能ある作家でも、壁に頭を打ちつけたような時期に見舞われることがあるものである。そんな時、作家は不意の沈黙を強いられたり、あるいは逆に不本意な濫作に陥ったりする。いずれにせよ、結果としてみると、人々は作家の一生の中で不可思議な空白を見出すことになる。

大正八年あるいはそれより一、二年前から十二年の関東大震災までの数年は、谷崎氏に於けるそういう時期であったのではないかと思われる。氏はこの頃の一時期的映画に異常な興味を示し、シナリオを書いたり自ら制作したりした。戯曲作品が多く、小説は寥々たるもので、わずかに大正八年の「母を恋うる記」をあげることできようか。

住居を横浜に構えるようになったが、これは西洋風の生活と雰囲気への憧れのためである。この西洋趣味は、西洋文化の真髓の把握を旨とするというようなものではなく、従って、先輩荷風に見られるような西洋と日本の文化の間にある齟齬（そご）矛盾に身を裂かれる苦悩といったものはみじんもなかった。氏の西洋への憧憬はあくまでも異国趣味（エキゾチック）の追求であり、洋服を着、洋食を食べ、ベッドに寝るということだけで、その欲求は満たされ得たのである。それは、横浜と神戸とせいぜい上海で済まされたので、自ら「相当な西洋熱」と言っているにも拘らず、氏は一度も洋行していないのである。真の西洋を決して必要としなかったところに、氏の精神の一つの特徴を見ることが出来るかも知れない。

作家活動の低迷と相俟って、この頃の氏は生活の上でも、妻千代子との間がうまくいかず、時経るにしたがって、どうにも埋めることができぬ深い溝となっていくようであった。

そんな折、関東大震災が襲った。